資　料

中学生におけるケアのイメージと将来の職業イメージ
～今後のケアを担う Z 世代に焦点をあてて～

青石恵子*，中山奈津紀**，太田勝正***

Images of Care and Future Occupations among Junior High School Students
- Focusing on Generation Z, the future of caring profession -

Keiko Aoishi *, Natsuki Nakayama **, Katsumasa Ota ***

Key words: Z 世代，キャリアイメージ，看護職，テーマティック・アナリシス法, FGI

受付日　2023 年 10 月 22 日　採択日　2024 年 1 月 25 日

*熊本大学大学院生命科学研究部　**名古屋大学大学院医学系研究科　***東都大学沼津ヒューマンケア学部
投稿責任者：青石恵子　keikoao@kumamoto-u.ac.jp

Ⅰ．緒言

日本は高齢人口の急速な増加の中で，医療，福祉などの問題に対応することが喫緊の課題となっている [1)]。その中で，健康および社会のケアニーズに対応するために，ケアを提供する専門職を目指す次世代の確保が不可欠である [2)]。看護・介護の将来の人材の受け入れを検討するために経済連携協定 [3)]や介護技能実習生 [4)]が受け入れられており，介護労働をめぐる政策的課題として人材の確保と育成をめぐる問題が発生している [5)]。介護職員の人材不足には賃金などの経済的問題も指摘されている [6-9)]が，賃金だけでなく，教育・研修に力を注ぐ必要が示唆されている [10)]。このような状況のなか，これからの時代を担う若者のケアの意識や職業としてのケアについてどのような認識を持っているかの調査は医療専門職の養成学校に入学後の生徒を対象とした研究が大半であった。

キャリア教育として中学校における職場体験は，小学校での街探検，職場見学等から，高等学校でのインターンシップ等へと体験活動を系統的につなげていく重要な役割があると指摘している [11)]。小学校から職場見学，中学校で職場体験を実施すると，小～中学生は将来のキャリアイメージを抱きはじめ，キャリアの選択やキャリア意識を形成する年齢になると考えられる。高等学校ではインターンシップ [11)] が行われるため，その前の中学生においてケアおよびケアの職業に対する認識を探ることはケアニーズに対応する将来の専門職の確保につながる重要な知見を与えてくるものと考えた。中学生を対象にケアの意識を確認した研究は見当たらず，高齢社会に対する意識調査をしたものが 1 件 [12)]あるのみであった。そこには高齢化社会に関する関心について，学年，性別に関係なくかなり低く，基本的な知識も備わっていない者が多かったことが報告されている。また，高齢者と同居している群は非同居群に比べて介護の必要な高齢者に対する思いやりの意識が高いことなどが認められていた。一方，中学生・高校生の職業知識の広がりと職業関心に関する研究 [13)]では，看護師は中学生女子の知りたい職業 6 位で 52.0％であるのに対して高校生女子は 35.4％と大きな差があった。この要因として，中学時代のステレオタイプ的な憧れから，高校生になって体験的に関わる機会があったり，メディアなどで比較的容易に仕事について知

る機会があったことなどが示されている。看護大学生に自分の職業を看護職と決定するまでのプロセスについての研究では,【生育環境による看護師のイメージ化／非イメージ化】など 10 カテゴリーが報告されている[14)]。これからの時代を担う Z 世代の若者のケアおよびケアの専門職についてのイメージについて具体的な調査は行われておらず，看護というキャリア選択に影響する要因についても十分な知見はない。

そこで今回の研究では，看護に特定せずに幅広く「ケア」のイメージを把握し，職業選択や進路について具体的な意識が聴取できるよう個々の「ケア」イメージを優先することで看護師の人材確保に役立てる知見を得ようと考えた。研究目的は、中学生の「ケア」から連想するイメージが将来の職業イメージにつながっているかを明らかにし，今後の看護の担い手となる人材確保に向けての示唆を得ることである。なお，本研究の意義は， Z 世代のほぼ最後のグループである中学生を対象としたケアのキャリアイメージ研究の例はなく，今後の研究に寄与する有用な情報を提供するものである。

II．方法

1. 研究デザイン

フォーカスグループインタビュー（以下，FGI）による質的記述的研究である。

2. 対象者

本研究の対象者は，中学生（1～3 年生）である。研究対象者の選択基準は，中学校の普通学級に通う健康な生徒とし，重篤な持病（特に精神的な疾患）がある生徒は除外とした。

3. 調査方法

本研究の対象者の設置主体に偏りが生じないよう恣意的に公立，私立，国立の 3 種類の中学校にリクルートした。研究者より中学校の代表者（校長または教頭）に趣旨を文書および口頭で説明し，賛同が得られた中学校に協力者の募集を依頼した。各学校 6～8 名を募集し，定員を満たした時点で募集を終了した。応募した生徒に対して研究者から文書および口頭で研究概要について説明した。参加を希望する生徒に保護者用の研究説明書を持ち帰ってもらい，保護者の同意を確認し，賛同が得られたら同意書に署名したものを中学校の代表者に提出してもらった。再度，生徒に参加意思を確認し同意を得られた者を研究対象者とした。

インタビューガイドを用いて学校ごとに FGI を実施した。事前に中学校の代表者とインタビュー方法について打ち合わせ，個別インタビューでは緊張感が強くなり自分の思いが伝えられない生徒もいるため，協力者が得られにくいこと，ケアに興味のある生徒に偏る恐れがあることなどの意見から，FGI を採用した。協力者は自薦だけでなく，他薦や友人を連れてくるなどの調整を行った。FGI ではグループメンバーの意見が個人に反映しないように，事前に話す内容をメモ書きにして来るよう配慮した。また、インタビュアーは FGI の経験や中学生を対象とした研究をこれまでも実施している研究者 2 名が担当した。対象者の生徒らとは初対面であり，緊張をほぐすための雑談の時間を設けてから FGI を開始した。均等に質問を投げかけ，途中で意見交換があった場合はサブインタビュアーが記録をフォローし，発言し易い環境づくりを行いながら真の意見が聴取できるよう配慮することで妥当性を確保した。

質問項目はオリジナルで作成し，13 項目あり，①皆さんにとって「ケア」はどういう意味か，②「ケア」は好きか，③皆さんは「ケア」をしたことはあるか，④皆さんは「ケア」を受けたことがあるか，⑤皆さんの住んでいる地域での「ケア」が役立っていることは何だと思うか，⑥世界で「ケア」が役立っていることは何だと思うか，⑦「ケアの仕事」という言葉で皆さんは何を連想したか，⑧「ケアの仕事」をしている人はどんな人を連想したか，⑨皆さんは，「ケアの仕事」の良い面は何だと思うか，⑩ケアを受けている人たちはケアの問題点やマイナス面は何だと思っていると思うか，⑪「ケアの仕事」の資格の取り方を知っているか，⑫ケアの仕事の中で勇気づけられるものは何だと思うか，⑬ケアの仕事の資格を取ってみようと思うかについて語りを得た。なお，「ケア」の捉え方を幅広く解釈し

てもらうため，用語や概念の説明は行わず，個々のイメージを優先した。
インタビューは各学校が指定した教室で途中 5 分の休憩をはさみ約 60 分間実施した。許可を得て IC レコーダーに録音し，逐語録を作成した。データ収集期間は 2019 年 9 月から 2020 年 2 月である。

4. 分析方法

テーマティック・アナリシス法（テーマ分析法）[15]を用いて分析した。この方法の利点として，枠組みや方法論がなく矛軟（flexible）である一方で，コーディングや分析の厳密性については確固たるものがある点[16]である。

テーマの抽出のために①適切なコードユニットを決定した。本研究ではインタビューガイドの各質問をコーディングユニットとした。コーディングの方法として，ケアについて語られている語や重要と思われる語を探してコードを付けた。②コードだけでは詳細な情報が残らないことを考慮して，明確な定義を付けた，③コードに含まれる条件と除外する条件の決定し，④肯定的，否定的な具体例の抽出を行った。⑤協力者間およびグループ間の分析結果の比較はコードと語りの類似性と創意性を比較し，コードをある程度収束させた。⑥信頼性の確保として，再テスト法を行い，一定期間あけて再コーディングした。この手順に準じて，分析を繰り返した[15]。最終的にコードからサブテーマを抽出し，テーマを生成した。

なお，分析は研究者全員で実施し，質的研究に精通した研究者にスーパーバイズを受けた。

5. 倫理的配慮

各中学校に研究協力を依頼し，研究の目的とともに倫理的配慮について説明した。中学校の研究協力者によって参加意思のある生徒を募集し，生徒用，保護者用の説明書面を用いて，生徒の同意と共に保護者の同意を得て実施した。本研究は名古屋大学大学院医学系研究科生命倫理審査委員会からの承認を得て実施した。（承認番号 2019-0114-3）

III. 結果

研究協力が得られた中学校は，国立・公立・私立から各 1 校の合計 3 校だった。公立中学校，国立の中・高一貫校，そして，私立の中・高一貫校であった。参加を拒否した生徒はおらず，男子 10 名，女子 11 名，計 21 名の生徒から研究同意が得られた。参加者の学年は 1～3 年生であり，1 校は男子生徒だけの学校であり，他の 2 校は男女共学である。参加者の学年と男女の構成は，調査を依頼した学校の管理者（校長もしくは副校長）に一任したため，結果として表 1 に示すように学年および男女比に偏りが生じた。
抽出された 5 つのテーマについて，構成するサブテーマを示し，サブテーマごとに具体的な生徒の語りを示す。本文にはテーマは【　】, サブテーマは＜　＞, 語りは“　”で表示した。

１．テーマ 1【多様なケア】

このテーマは，3 つのサブテーマから成り立っている。

1）＜ケアは人やモノに対して行う＞
ケアは人やモノに対して行う／行われるものと捉える語りが最も多く, それは身体面と精神面に分かれ, 21 名のうち 12 名が身体的なエピソードについて, 17 名が精神的なエピソードについて語っていた。心身両面からケアを表現していたのは 12 名だった。身体面には，けがの手当てやマッサージなどのセルフケアの経験が語られていた。

“けがしたら，自分で包帯を巻いたり，薬塗ったりして治療します”（2 年生男子）

“日頃からなるべくけがしないようにケアするとか，運動した後に自分で軽くもみほぐしてマッサージするとか, そうやって自分なりのケアを毎日行う”（2 年生男子）

一方で，ケアを人だけでなく，モノから与えられるものとして捉えていた生徒が 13 名おり, その中には動物から与えられるケア，それにスポーツや芸術などの人に感動を与えるものをケアだと認識していた。

“ペットのインコがいるんすけど，そのインコもやっぱ心のケアをしてくれると思う”（2 年生女子）

表１ 研究協力者の属性 （人数）

	設置種別	1 年生	2 年生	3 年生	男子	女子	合計
A 校	公立中学校（男女共学）	0	6	0	3	3	6
B 校	国立中学校（中高一貫校・男女共学）	4	0	4	0	8	8
C 校	私立中学校（中高一貫校・男子のみ）	3	2	2	7	0	7
	合計	7	8	6	10	11	21

“音楽や絵などの芸術で人の心が癒やされるなら，世界共通でそれはケアになる”（3 年生女子）

2）＜ケアを通して得られるものがある＞

ケアを通じて得られるものについて 19 名の生徒が語っていた。何らかのケアを行った結果として，

ケアの提供者にフィードバックされるものがあること，それもケアだと生徒たちが認識していることが示された。ケアを通じて得られる達成感や喜びを味ったり，幸せな気持ちになったり，ケアを提供することがケアの提供者にとってもよい結果をもたらすと認識していた。

“ケアを受ける側もうれしい気持ちになれるし，ケアをする側も相手の笑顔が見えたり，感謝の言葉を言ってもらえたりして，お互いが幸せな気持ちになれるのがいい”（3 年生女子）

ケアは与える／受けるという一方向のものではなく，ケアをすることで双方向性によいと認識しており，ケアから得られる喜びも多様なケアの一つであると捉えていた。

3)＜自分に対して施されるすべてのものがケアである＞

10 名がケアは人とのつながりを深めるものや平和を感じさせるものと広く捉えており，自分に対して施されるすべてのものがケアであると認識していた。

“(ケアは) 心の安らぎを求めたり，与えたりすることだと思いました。求めることと与えることが一緒にあるのは，ケアというのは自分１人でもできるかもしれないけど，人と人がつながっていることでより深くなるものだと思ったからです”（1 年生女子）

２．テーマ 2【ケアが行われる場や状況から捉えるケア】

このテーマは，4 つのサブテーマから成り立っていた。

1）＜ケアは身近な人が与えてくれる＞

21 名のうちの 8 名が，母親や兄弟，祖父母とのエピソードについて語り，ケガや病気になったときの看病，つらい気持ちを聞いてもらった経験などをケアとして捉えていた。

“左手を骨折したことがあって，そのときにご飯を食べたりとか，字を書くのとかも左手がつけないから，うまく書けないし，お風呂にも入るのが難しかったときに家族がケアをしてくれた”（3 年生男子）

これに対して，友達とのエピソードをケアとして捉えていた生徒が 5 名いた。

“「頑張れ」と言われたり，ちょっと体調悪そうにしてたら「大丈夫？」と言われたり。そういうちっちゃいこともケアの中に入るのかなと思って。それなら，みんな無意識のうちにお互いにケアし合ってるのかなと思いました”（2 年生女子）

2）＜病院や学校から提供されるケア＞

学校内でのエピソードをケアとして語る生徒が 5 名いた。

“ 担任の先生にすごく支えられて，ここまで来れたと思うので，いちばん私の心に残っているケアというのは，担任の先生が話を聞いてくれたり，フォローしてくれたりしたこと”（3 年生女子）

最も多いケアの場についての語りは，病院におけるものであった。病院での病気等の治療や精神的なケアとだけでなく，病院や介護施設そのものがケアであると語っていた。また，介護施設で行われてい

ることをケアとして捉えている生徒が 5 名いた。

“全体的なケアとして見たときに，病院とか介護施設などがケアだと思ってます”（2 年生女子）

“老人ホームとかでお手伝いしたりすることもケアかなと思いました”（1 年生男子）

3）＜地域の人々から受けるケア＞

地域での日常的な挨拶や地域の人々による見守りをケアだと捉えていた生徒が 16 名いた。その中で，学校行事を通じた地域の人々と交流や高齢者とのふれ合いを取り上げた生徒が 8 名，日常の挨拶をケアだと捉えた生徒が 3 名いた。ボランティア活動そのもの取り上げて，それをケアだと答えた生徒はわずか 1 名（1 年生男子）であった。

“この地域に住んでいるご高齢者とかにも挨拶することで，その方の心のケアとかにもなったり，その人がちゃんと今，元気で今いるのかな？とか”（2 年生男子）

一方で，地域住民による見守り，町を巡回している警察官が声をかけてくれること，駅員による障害者の乗降の支援などをケアだと捉える生徒がいた。

4）＜国際協力や環境問題へのケア＞

11 名が災害復興活動，発展途上国への支援，赤十字の活動とともに，地球温暖化防止のための取り組みが海面上昇に苦しむ太平洋の島々に対するケアになると捉えていた。さらに，それらの活動のための募金活動をケアだと捉え，1 名ではあるが介護のための施設の建設に使われる税金もケアの一つだと捉えていた。

“地球温暖化で海上が上がって沈みそうな島とかがあるそう。それを防ぐためにコンビニとかでレジ袋をわたさないみたいな，有料化していて。沈みそうな国に対してのケアだと思ってる”（2 年生男子）

３．テーマ 3【ケアを担う人】

このテーマは，2 つのサブテーマから抽出した。

1)＜医療や介護の専門職によってケアが行われている＞

すべての生徒が，医療や介護の専門職によってケアが行われていると述べた。医療の専門職の中には医師や看護師，介護の専門職としては，介護士が含まれていた。一方，7 名は，非医療者もケアを行っているという認識をもっていた。資格が必要な非医療系の専門職としては，教師，弁護士，カウンセラーなどが含まれた。また，12 名が，資格を必要としない非医療系の職種としてスポーツトレーナーやピアノの先生等も上げ，同じようにケアを行っていると語っていた。

“私は医師，看護師，弁護士，カウンセラーがケアの仕事をしている人だと思います”（2 年生女子）

“私は，学校の先生もケアの仕事だと思っています。学校の先生は，僕たちが社会に出たときにちゃんと生きるようにとか，僕たちのことをいつも気遣ってくれて，いろいろなことをやってくれている。だから私は，教師もケアの仕事だと思う”(2 年男子)

自分たちが受けたより広義のケアをもとに，それを提供してくれたさまざまな人々，職業を回答していた。

2）＜ケアを提供する者は資質が備わっている＞

7 名が「優しい気持ちや思いやりの心を持っている」ことと述べていた。加えて，6 名は「資格の有無ではない」と述べ，3 名は，「すべての人やすべての仕事がケアにつながっている」と述べた。すなわち，ケアを提供する者には自ずとケア提供者としての資質が備わっているという認識であった。

“私は，ケアの仕事をしている人は，自分以外の人を中心に考える，自己犠牲してまで相手のことを考えるという，気持ちがあると思う”（2 年男子）

“私は幼稚園の先生もケアの仕事だなと思う。小さい子は素直だから，幼稚園の先生も心が優しくて素直じゃないと，子供は動いてくれないのかなと思う。だから，ケアの仕事をしている人は，心が優しくて素直な人なのかなと思いました”（2 年女子）

一方で，「女性がする仕事」などジェンダーを意識した発言や，「年齢が高くてもしている仕事」など，豊かな人生経験がケアに役に立つことを示唆する発言もあった。

“私は，主婦とかの年代の人たちがやっているイメージが強くて，どちらかというと女性のほうが多

くやっているイメージが強いです”（3 年男子）

４．テーマ 4【ケアのネガティブな面】

ケアは基本的に良いものであるというケアの固有の価値を捉えていた。しかし，ケアを受けている側が捉えるケアの問題点やマイナス面について質問するとすべての生徒からケアに伴う問題点やケアが抱える課題が示された。それらは，＜ケア提供者が抱えるストレス＞と＜ケアの際に生じる気持ちの行き違い＞の 2 つのサブテーマに分類された。

1）＜ケア提供者が抱えるストレス＞

生徒が注目したケアは，家族などから受ける身近はケアではなく，病院や介護施設で提供される専門職によるケアだった。介護士などのケア提供者がかかえるストレスが 4 名から示された。

“つらくなっても，仕事ってそんなに変えられないから，それでどんどんストレスがたまっちゃうっていうのはあるかもしれません”（3 年生男子）

“介護士の人が老人ホームで虐殺とかあるじゃないですか。ケアすることがちょっと嫌いになってるんじゃないかと思う”（2 年生男子）

2）＜ケアの際に生じる気持ちの行き違い＞

ケアを良いものと捉えているものの，必ずしも良い面ばかりではないと指摘する生徒が 13 名いた。最も多く指摘された問題は，ケアの際に生じる気持ちの行き違いであった。ケア提供者は良いことだと思ってケアを提供していても，相手が望まないことまで行ってしまったり，すべてが相手にとって嬉しいケアではない可能性があることを捉えていた。

“ケアをする側は相手にとっていいことだと思ってしても，もしかしたら，相手はあんまりうれしく思わないこともあると思うので，それが分からないのは，マイナス面かな”（3 年生女子）

ケアの際に生じる気持ちの行き違いは，自分自身が経験した友達とのやり取りの中からも示され，ケアが時としてお節介となる可能性が示された。

“話を聞いてもらうだけでいいけど，アドバイスされると，逆にちょっとそれは無理だなとか，それはちょっとできないなという，嫌だなと思うことがあると思います”（1 年生女子）

一方で，ケアを通じて自分の秘密（個人情報）が必要以上にケア提供者に伝わる個人情報の漏洩を心配する意見もあった。

“相手のことを信用するということが大切で，話した後も相手が本当に大丈夫なのか？みたいな不安が心の中に広がってしまうのがケアの問題点だと思います”（3 年生女子）

５．テーマ 5【職業としての可能性】

このテーマには，身近なケア，非専門職によるケア，そして専門職によるケアまで生徒たちは提供するケアの内容をさまざまなレベルでとらえ，またケアの提供者についてもいろいろな立場があることが共有された。8 名はケアを提供する資格について取りたい，あるいは，将来の選択肢の一つになると答えた。しかし，積極的に目指したいと答えた生徒はその内の 2 名だった。また，1 名は資格ではなくケア提供者として求められる資質を身に付けたいと答え，3 名がケアは資格がなくてもできると答えていた。以上のことから，テーマは職業としての可能性とし，テーマのみでまとめられた。

“ケアの仕事についていろいろ考えることができて，ケアの大切さとかも分かったので，そういう面では，将来取れるかとか分かんないけど，そういう人の役に立てることが分かったので，もし取れるなら，いつか取ってみたいなとは思いました”（3 年生女子）

“自分が仕事にしなくても，資格を取らなくても，人のことを癒やすとか，そういうことはできると思うので，資格は別になくてもいい”（1 年生女子）

一方で，9 名はケア提供者の資格の取得について，自分の将来の夢や選択肢には入っていない，あるいは，重労働だというイメージから取りたくないと答えていた。

Ⅳ．考察

中学生を対象にインタビュー調査を通して「ケア」から連想するイメージが将来の職業イメージにつながっているかを明らかにし，今後の看護の担い手と

なる人材確保に向けて考察した。

１．中学生が考えるケアのイメージ

生徒たちは,「ケア」を広く捉えていた。生徒たちが，ケアには身体面のことだけでなく精神面のことがあることを踏まえ，ケアを提供するもの，ケアが行われるものとして，人だけではなくペットが自分の心のケアになるという発言や，物に対するケアもあれば，友達同士の励ましがケアである，スポーツや芸術などから人に感動を与えるものをケアなど，ケアに対して幅広く【多様なケア】のイメージを持っていることが示された。

ケアは「心の安らぎを求めたり，与えたりすること」,「人との繋がりによって深まるもの」など，ケアが関係性によって深まるものであることなどが語られたことから，これまでケアを行い，ケアを受けた経験によって，ケアの本質を捉えるテーマが導かれた。

生徒たちのケアの経験は，身の回りの日常的なやりとりや人間関係の中での経験として語られ，自身や家族の病気などの経験も背景にあったかもしれないが，今回は具体的な状況は確認しなかった。自分の身の回りから学校，病院などの施設，そして地域生活の中へと視点が広がり，環境問題，復興支援や途上国支援とともにそのための募金活動までケアだと捉えている様子が示された。生徒たちは，身の回りに起きていることの中に「ケア」を見い出していたことが考えられた。文部科学省はキャリア教育を一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育と定義している [17]。看護や介護における専門職としてのケアを知ってもらうために，授業や課外活動で病院や介護施設などを訪問する機会を体験のみで終わらせず，基盤となる能力や態度を育てるキャリア形成へと導くものにすることである。現在の中学生は，生活の中でデジタル機器を活用することが当たり前である特徴を持っている [18] が，今回の参加者の情報源は，Z 世代特有の YouTube などからの情報活用はされていなかった。Z 世代は YouTube で流れる映像や声に信頼を寄せる傾向がある [19]と指摘されている。また，経営学部生に看護師に対するイメージ調査では，メディアによる報道が看護師の様々な評価をより高いものとするような内容であったと報告している [20]。これらのことから，従来の情報発信方法（例えばテレビや新聞のニュース）に加えて，Z 世代を意識した SNS の活用によって【多様なケア】のイメージをケア専門職へ結び付けられる戦略が有効であると考える。

２．将来の職業イメージ

すべての生徒が，ケアの提供者として医療専門職である看護師，医師，介護士などを挙げたが，それ以外に非医療系の専門職である教師，弁護士，カウンセラー，スポーツトレーナーなどを挙げるものもいた。生育環境や看護へと傾倒した経験 [14] が職業選択に深い関わりもあるが，自分たちが受けたより広義のケアをもとに，それを提供してくれたさまざまな人々や職業を回答したと思われた。発言の多くに「ケアの仕事は人を幸せにする仕事である」というポジティブな概念の影響を強く受けていた。資格の有無にかかわらず，すべての人間が支え合い，生きていくことに, ケアは存在することを示唆していた。

ケアの仕事を職業として積極的に目指したいと答えた生徒は，全体のわずか 2 名だった。選択肢の一つとして，資格は取ってみたいと答えた生徒が 6 名いたが，自身が目指す資格や職業だとは考えていなかった。高校生を対象とした看護体験は、将来の進路･職業選択に重要な役割があるとの報告 [21, 22]から，中学生では職業や資格まで選択するには時期的に早かったかもしれない。一方で，高校 1・2 年生の時期は職業展望における探索期にあり，将来の進路・職業について思考・模索しながら学習していく時期である [21]とすると，中学生の時期に将来のキャリアイメージを付ける情報の提供は必要であると考える。

生徒たちが捉えているケアというものが，医療や介護の場で提供されるものというより，むしろ日常生活や地域のふれ合いの中で提供されるものである事が多く，ケアのイメージが職業や資格として繋がっていなかった。大学等のオープンキャンパスには，ケア専門職に興味のある高校生が参加することが報告 [23, 24]されており，また早期に進路選択をした学生ほど職業的同一性形成得点が高いことが明らかにな

っている[25]。ケア専門職を進路に決定するまでの小中学生の時期にも戦略的なキャリアイメージに介入することが有効であると考える。高齢人口の急速な増加の中で，健康および社会のケアニーズに対応するために，ケアを提供する専門職を目指す若者の確保は不可欠である。少なくともケア提供者に関心をもつ生徒らを将来のケア専門職に育てることが人材育成につながると考える。

研究の限界

本研究は新型コロナウイルス感染症が蔓延する直前に企画し，インタビューしたものである。そのため，現状の協力者に留まることとなり，対象選択に偏りがある生徒からの意見であることは否めない。インタビューに応じてくれた生徒あるいは家族などに病気をあるなどの背景は確認していないが，それらがケアに対するイメージに影響を及ぼした可能性もある。また，自分の意見を持っている人に限られ，思いを発言することが苦手な生徒の意見は反映できていない可能性がある。しかしながら，一部ではあるが生徒たちのケアのイメージに関する生の意見を聞けたことは価値があると考える。

Ⅴ．結論

中学生は，「ケア」から，人から受けたケアの経験やモノをケアした経験，動物やスポーツ・芸術等から得る感動をイメージしていた。また，これらのケアは双方向性であり，関係性によって深まるものであると認識していた。これらのケアに対するイメージは，医療や介護の場などから連想するものもあったが，動物やスポーツ，芸術などは将来のケア専門職としての職業イメージには繋がっていなかった。生徒たちが考えるケアは，日常生活や地域のふれ合いの中で提供されるものの中で捉えられていた。今後の看護の担い手となる人材確保には，ケアを看護職として結び付けられるよう身近な場所で体験できる機会の提供ですそ野を広げ，ケア提供者に関心をもつ生徒らにはより深い関心につながるキャリア形成が必要であることが示唆された。

謝辞

本研究にご協力を頂いた中学生の皆様ならびにコーディネートをしてくださった中学校関係者に御礼申し上げます。なお，本研究の成果（逐語録）の一部は国際比較のために提供しており，本論文の中で示した 39 の語りの中の 6 つについては英訳されたものが論文（Ann Gallagher, et.al. (2021). Views of Generation Z regarding care and care careers: a four-country study. International Journal of Care and Caring, DOI: https://doi.org/10.1332/239788221X16308608299691 ）に引用されている。加えて，日本看護倫理学会第 14 回大会でポスター発表している。本研究は，JSPS 科研費 JP18H03074 の助成を受けて行ったものである。

文献

1) 内閣府：高齢化の状況，令和 5 年版高齢社会白書（全体版），https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2023/zenbun/05pdf_index.html ，2023.
2) パーソル総合研究所・中央大学：労働市場の未来推計 2030，https://rc.persol-group.co.jp/thinktank/research/activity/spe/roudou2030/files/future_population_2030_4.pdf，2020.
3) 後藤真澄：日本 EPA（経済連携協定）の看護師・介護福祉士候補者の教育・研修の課題に関する文献研究，中部学院大学・中部学院大学短期大学部教育実践研究，2(2)：125-134，2018.
4) 平野裕子：グローバル化時代の介護人材確保政策－二国間経済連携協定での受け入れから学ぶもの－，社会学評論，68(4)：496-513，2018.
5) 北浦正行：介護労働をめぐる政策課題－介護人材の確保と育成を中心に，日本労働研究雑誌，641：61-72，2013.
6) 花岡智恵：介護労働力不足はなぜ生じているのか，日本労働研究雑誌，658：16-25，2015.
7) 下野恵子：介護サービス産業と人材確保，家計経済研究，82：13-23，2009.
8) 周燕飛：介護施設における介護職員不足問題の経済分析，医療と社会，19(2)：151-168，2009.

9) 内匠功：介護職員の人手不足問題，生活福祉研究，88：54-69，2014.
10) 大和三重，他：介護老人福祉施設における介護職員の離職要因，人間福祉研究，6(1)：33-45，2013.
11) 文部科学省:中学校職場体験ガイド,第1章 職場体験の基本的な考え方，https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/05010502/026/001/001.htm
12) 山本浩二，他：高齢化社会に対する中学生の意識および知識に関する調査研究，学校保健研究，37：20-29，1995.
13) 吉中淳，他：中学生・高校生の職業意識の広がりと職業関心に関する研究，進路指導研究，22(1)：1-12，2003.
14) 白鳥さつき：看護大学生が看護職を自己の職業と決定するまでのプロセスの構造，日本看護研究学会雑誌，32(1)：113-123，2009.
15) Boyatzis, R.E: Transforming Qualitative Information: Thematic Analysis and Code Development, 77-101, Sage Publication, London, 1998.
16) 土屋雅子:テーマティック・アナリシス法 インタビューデータ分析のためのコーディングの基礎，13-26，ナカニシヤ出版，京都，2016.
17) 文部科学省：中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」＜抜粋＞，https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/attach/1303768.htm?_fsi=tiyvrsRa&_fsi=tiyvrsRa, 2011
18) 原田曜平：Z 世代 若者はなぜインスタ・TikTok にハマるのか?，3-46，光文社，東京，2020.
19) 山岡仁美：今どきの若者の育て方・支え方 Z 世代の特徴を踏まえて，ナースマネジャー，22(11)：75-78，2021.
20) 清水真，他：看護師に対するイメージー経営学部生を対象にー，富山商船高等専門学校研究集録，42：81-102, 2009.
21) 安達智子：大学生のキャリア選択ーその心理背景と支援，日本労働研究雑誌，12：27-36，2004.
22) 堀泰雄:高校生の1日看護体験が看護師の進路，就労先決定に与える影響，富山県立中央病院医学雑誌，43(1･2)：17-20，2020.
23) 白木裕子，他：保健師教育に関する看護系大学生および高校生の意向，茨城キリスト教大学看護学部紀要，2(1)：45-48，2010.
24) 二神真理子，他：佐久大学看護学部オープンキャンパス参加者アンケート分析からみえてきた開催時期による参加者の傾向，佐久大学看護研究雑誌，12(2)：185-191，2020.
25) 富永美佐子，他：中学生はキャリア学習でどのような力を身に付けるのか？ー人間として成長する力尺度（中学生版）の作成ー，人間発達文化学類論集，28：71-80，2018.